

藤原師長八郎所

櫻田

笠寺

星寺

鳴海

鳴海上野

鳴海寺

鳴海神社

芭蕉翁千鳥家

同家文庫

衣井浦

音聞山

名産有松校

今川義元塚

堀川

沈鯉鮒

知立神社

八橋古蹟

橋雲寺

無量寺

沈鯉鮒馬市

矢別岩

浮瑠璃地境

矢別川

狹投神社

矢別岩

大樹寺

不屋川

小豆阪

二村山

衣乃里

藤川

山中里

宮地山

法藏寺

赤阪

御油

本坂坂

二見道

御津神社

免足神社

本勘以故居

砥鹿神社

吉田

豐川

牛頭天王

花地

煙巖山

鳳來寺

本堂 三層塔 毘沙門天

御宇権現

伊勢兩宮

辨助堂

天御祠

名跡題石

王子

荒神祠

人師堂

尼行道

行者歸

王子

妙法龍

興院

牛鼻

石卷神社

窟觀音

二川

白菅凌

汐見坂

富士見松

高師山

橋本

白菅凌

女谷

風爐井

角避彦神社

紅葉寺

猪鼻淵神社

濱名川

濱名橋蹟

荒井

猪鼻淵神社

源右山

濱名湖

今切

熊山寺

引佐細江

舞阪

馬郡觀音

音羽松

若林二堂

賀茂祠

鴨江寺

濱松

引馬野

藏坊社

五社明神

三方原

犀ヶ崖

大安寺

龍禪寺

風々松





宮驛
 淡香居

東海道名所圖會卷之三目錄 終

頭陀寺
 京江戸行徑同里
 朝野墓
 老母墓
 植松原
 天竜川
 中泉
 見附
 袋井
 春川
 志呂波磯

蒲神明
 沈田若
 八幡宮
 三香登橋
 妙星寺

茅場
 熊野古蹟
 櫻池
 金札懸
 名産花菰



鳥居
本堂
講堂
僧坊



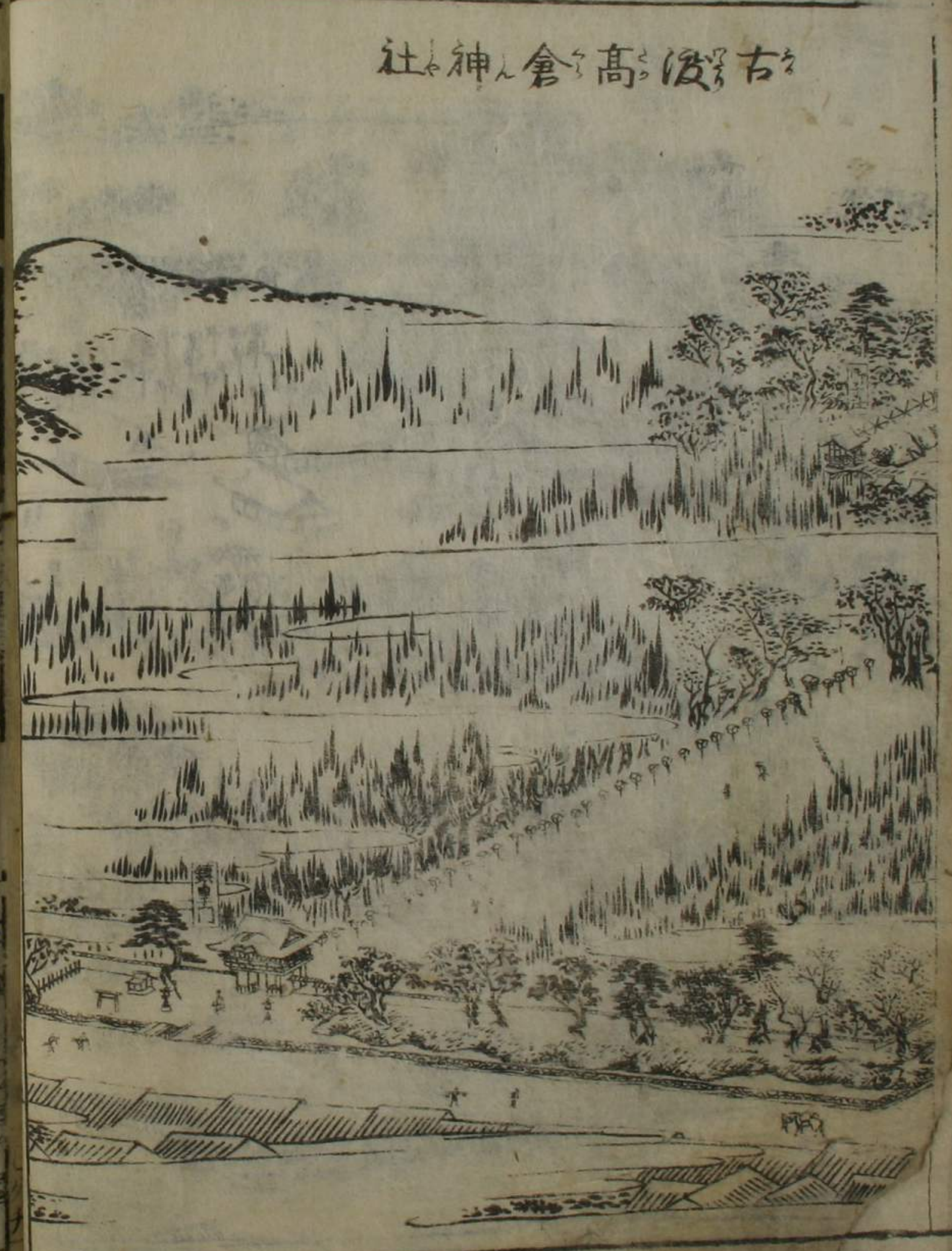
御田
八
御
所
末
社
末
社



南殿 正殿 大宮 寶田



古^の波^の高^の倉^の神^の社



張宮

張宮の畧記... 張宮の神燈... 張宮の神燈... 張宮の神燈...

一鳥居

一鳥居... 鳥居の南あり八境... 鳥居の南あり八境... 鳥居の南あり八境...

日本武尊御歌二首... 阿由乃由美良平美也... 許佐留良比加阿波... 村裡阿古波和加比多知知

正殿

正殿... 西の方あり... 正殿の東北方あり齋殿

第壹間

天照大神

第二間

素盞鳥尊

第三間

日本武尊

第四間

宮簀媛命

第五間

建稻種命

宮簀媛命所兄尾張姓熱田神宮

土用殿

土用殿... 正殿の東北方あり齋殿

神躰草薙寶劍

神躰草薙寶劍... 日本紀曰素盞鳥尊乃以蛇韓

少欽故裂尾而着即別有劍焉名爲草薙... 同此劍昔在素盞鳥尊許今在尾張國也... 所佩草薙橫乃是在尾張國年魚市郡熱田

八劍神社

八劍神社... 大宮の南を町許西の方南台小鎮坐祭神十座

高藏神社

高藏神社... 祭神仲哀天皇

日破神社

日破神社... 祭神仲哀天皇

氷上神社

氷上神社... 祭神二座日本武尊宮簀媛命

大福田社

大福田社... 祭神正哉吾勝尊

源志支神社

源志支神社... 祭神尾張姓十一世乎止世命

紀志支神社

紀志支神社... 祭神眞敷刀媛命

孫若神社

孫若神社... 祭神瓊杵尊

寶田神社 國所あり神名帳云御田神社 祭神保食命 祖産靈命

南新宮 大福田社の少あり祭神天照右神 素盞烏尊 側小飯盛強五命祠あり

青衾神社 南面石高橋北東あり神名帳云青衾神社 社の後名泉あり

鈴御前社 傳馬町あり 祭神天細女命

末社 右八百萬神祠。編若祠。王若祠。赫祠。後園祠。楠所あり祠。乙子祠。今宮。已上大宮の御の方あり

左八百萬神祠。二名新宮。賀茂祠。龍田祠。内天神祠。已上の大宮の東の方あり

一之津若祠。土神祠。山神祠。自神祠。金神祠。龍神祠。清水祠。所井祠。已上の大宮の後あり

姉子祠。今夫祠。水向祠。素盞烏祠。日長祠。已上の海蔵門の外神幸道あり

山玉祠。姉子祠。今夫祠。水向祠。素盞烏祠。日長祠。已上の海蔵門の外東側あり

外天神祠。鎮皇門の外あり。白衾祠。新水止祠。天岩戸事相の二宮の神三下并あり。松姫祠。布曝女町あり

其外末社所。ふまへ。畷之

十六夜日記 尤日尾張國ありといふむまへやとけりねぬるればありといふ 駒や老々々まきまきりんを早振名ありといふ杜の下位 奉議雅経

宮へまゐりて祝とりのてて書は多くなる

祈る哉よ家おとよとて海さかかく塔も神の酒に 尾張の園藝田のまふのうね神垣ありらちうけまをくまつりて拜なるふ本まをくねりま森の本に男より名目けまくくうつりて

風ふ礼れうらうらからおよふれく神さびるうらやあもくうたむ此

救もまへ本まよまぬさ徳者のほとまをうふんくさか白と物ら

書ひまにまのまりのくまもかすく空の成人のさけ言素盞烏此

尊を初て出雲の園小宮修り有たり八雲たのいける大和言やと

是よりまはままれる其後景行天白井神代まのみにふあをたれ

のりといり又云い宮に本経の茶をさとりまの神劔く景行の傳子

日本武尊と夷をたのけり帰るぬ耐藝田にさぬり結ふことま

一條院に神時大江正平といふ侍士ありなり長保の末ふあて當園はさるに

ひりたりなるふ大般若とまきく此宮にて供養とこけりなる

あつまむの茶葉なるに秋のおおちて幾代かきあがりて

老せぬる有りといひたりや遂に海ありせん

たれ當社の人皇十二代の帝景行天皇は所時より所鎮座より

天智天皇の所宇故有る皇都遷り十九年遷て

元年再びとせ所遷座の其初勅使例祭小立申て官幣と奉らせ

の事其銘風今あり中古奉幣使意りより忌部廣成ありと嘆て古語拾

遺不書より先社頭の巖ある事八境小朱は名居大宮八叙神社源をま乃

社と初め按社末社れ教く石は高橋下馬のち居南面の門を海蔵門といひあり

神幸道より門の内より不實梅肉の天神祠あり里教ふり者庵の玄宗皇帝四百

餘州と治先は日本に取んて計りて當社の所神志より一と仮ふ楊貴妃

と現れ世と乱りゆひを日本とる事叶り貴妃馬嵬が京を高力士

が為小空りくろせらるる玄室別れとあり方士楊通幽といふ者四方へつる

て魂魄と尋られ小日本茶葉山ふありまはるて當社小あり

一といふ則は内天神といふ楊貴妃は靈なること日本古く世人は臆を

社説より聞えたり然れと仙傳拾遺と引く晚風集より日本と載り

又東海瓊華集より秦は徐市始皇の詔を奉て不灰は茶を求りて日本へ渡り

熱田神祠あり茶葉宮と記一壹和信正熱田は平不綱福と傳詔を奉て

維摩會の講師と成惟蓮沙門は七母骨と高野山小藏をんとて東國より登りて

神祠小立考る神人灰骨の汚穢と忌て宿昔漸門外小草夜は其夜神宮小夏

は生ありて神助小従ひ惟蓮と珍饗りてこれ至孝と神明を賞りたるは新

羅國の沙門道行の草薙は寶劍の靈威を聞て神殿小入讀經一百日一竊く

竊小寶劍盜取の僧伽梨小褻と携持して筑紫小至り本國小歸り時

忽小海風暴起して浪に漂ひ去る事小傳を俄に黒雲一帯下りて劍を奪りて

元の如く神祠小藏む又治承の比より大政大臣原師長公平相聞れるは

さきよりなり時當宮小信一琵琶小彈りて明神感應りて寶藏

震動りり一平平家物語にも載りたりは靈威應驗奉て有る

ついで兩神殿に於て渡殿の殿祭文殿回廊拜殿勅使殿透櫓を右

樂所神樂所神樂舎神庫橋部屋社頭小石に燈燭あり銘曰

發田大神宮神寶前奉奇進石燈籠寛永七庚午拾正月佐之間大膳

亮平勝之と銘其高式文銘蓋の巨五尺許

西小鎮白土門東小春敵門外の佛殿に懸銅の神馬に繫あり

其外政所御饗殿大茶師堂に當社に神宮寺

側小不勅堂あり又其側小愛染堂あり大宮の後に雲見山と

いふに神井の池あり其井里に古跡小玉に井ありそをわたりに松岡園あり

乾の方不驚堂あり土人斷山是蓬萊山に舊蹟に和奇に松山といふ

宗祇乃方角抄ありていふに松岡園前の中庭あり西の方小白鳥山あり

これ日本武尊の陵に菖蒲池に旗綾町あり浦冠者範頼に越れり所之

故不蒲池あり頼朝の墓ありて出陣の母の熱田の大宮司の女と

諸書よみたり神寶前町小中は森徳名門宗法神の祖國の地味に門外に

本松あり高藏社の側小鉾取祠水神祠新宮ありは社頭石と携り

立たる小恙ありぬ路あり倍して一なる風俗も柞南社と熱田と跡まる幸

草薙寶劍と乘れ枝小恙並あり秋々光あり例の杉の梢小光燃上り

其下は田小焼倒れ田も熱りなれ社の名小吟と又神神傳ふ

王業

桜花あり人のあけが見おねおのける友をそのまん

あれい藝田大神神に神分とらんをうかの社に大宮司尾張姓代々を奉

々る小尾張貞職の女の名と松とりなる藤系季業小志とくあり

季範派ありなる後大神かく宛宣せ勢のひなるやうり季範初て大宮

司小成其末今ふたをむとらん玉葉集ありていふにされむりも今も示現利

生れ垂迹小志とまのりて一心再神に傳傳ふ頭を傾くれを春の花れ白ひ

鮮ありて秋の月れ清風小澄りて秋の音神樂に身傍人の法晴を

たるとに間断あり神燈の社の後小燈を四時の後祭あり是みなる

平天下に神寶前町と東海東山表道第一の靈社と云ふれり



五月廿五日
青田宮中祭

正月十一日
踏歌神事



浪花春泉齋画

舞田宮年中祭事

○正月元旦丑剋

大宮 八劔宮 大宮司奉幣

○同日朝

内院供侍 八劔宮小社下老て大宮に至る内院外院の供侍毎事少のせし
二月祈年祭十一月新嘗祭は三祭は大宮より下老し八劔宮供侍は
供侍調進の中より幸樂あり祝所祝詞有て神女神樂奏は幸樂祝詞神樂
毎事定れる事七右終て内外の儀あり社中一統小社仕これいふ宮小社あり

○同日未剋

外院供侍 八劔宮より下老て大宮に至る供侍少のせし同日神事 夜更の
儀式多し畧之

○同日晩

上千竈神社小社あり 二日晩 八劔宮の行ひ 三日晩 松崎宮の行ひ
四日晩 日割宮の行ひ 五日晩 南新宮の行ひ
これ八劔宮の行ひ云其儀は男女の難形と儀(難状)と

持し免酒飯と儀(後編あり)

○二日朝 三日朝

外院供侍 大宮老々例の

○五日朝

上千竈神の宮休ぶ於て初市の遺風あり寅の卯より社中在りの事
津福途とつひ群奉を祝の種々のものと幸樂を奉事し

○同日晩

大福田宮 陪從十人歩て十一日踏歌の禰あり 十日まで毎夕出

○七日朝

外院供侍 大宮共々例の如し
同日晩 大福田宮の陪從小かぬく 合水の儀あり 祈年正月十二日變水と
入て堅く封し大宮正殿の下小埋と並く今以懸取持来り分本公
あて水の儀おす多しよて
今年の豊凶は計りあるあり

○十一日朝

踏歌神事 大福田社より於て政禰 大宮 八劔宮 又大福田社より
終り社中倉欄魂成祭の如し 大宮 八劔宮 又大福田社より
神事 舞人十二人高巾子 舞人 陪從十人 舞人 陪從十人 舞人 陪從十人
吹波榊頭を竹川に殿儀みとり小笏梅子成合せり舞人 舞人 舞人 舞人
持つ吹波翁あり大宮福あれと舞む 八劔宮終り大福田宮お
至り大宮司出仕幸樂あり

○十二日

廳屋小おぬき蓬葉飾 希合水と懸小入封と

○十四日

歩射 六人の射角の儀射す之は歩 三十六歩

○十五日朝

外院供侍 海蔵門の前より

○同日午剋

歩射 六人の射丸の儀射す大宮司 祝師 三老等出仕少
規式 射場 海蔵門より 石橋まで 向より
むしひ日負取打て石と合せり故実あり 今以懸取

○九日

兩宮歩射會 社中會合して明年の神役を定め飲酒の礼と
歩射といふを他法故実多し

○二月初巳午未日

祈年祭 初巳日夜亥剋大宮大供所た右ふ條と以て禰と儀 豊西
大小神祇と祭の供所 調進後編あり

○同日未剋

高蔵宮 日割宮 大福田宮 水上宮 原志之神
其外諸社供侍 翌日撤之

○同日未剋

八劔宮 大供侍 翌日撤之

○同日未剋

八劔宮 大供侍 翌日撤之

○同日未剋

八劔宮 大供侍 翌日撤之

○同日未剋

八劔宮 大供侍 翌日撤之

○同日未剋

八劔宮 大供侍 翌日撤之

御田神社 御田神社 御田神社
 御田神社 御田神社 御田神社
 御田神社 御田神社 御田神社
 御田神社 御田神社 御田神社



○二月初未日午魁
 御田神社供御 養 鷹喰と奉 俗小鳥食と云ふれハ神事
 奉 鷹喰と奉 俗小鳥食と云ふれハ神事
 奉 鷹喰と奉 俗小鳥食と云ふれハ神事
 奉 鷹喰と奉 俗小鳥食と云ふれハ神事

○三月二日朝
 八劔宮内院供所 草餅 桃花神酒

○同日朝
 大宮内院供所 草餅 桃花神酒

○四月八日神事 郷代頭人補代頭人より大宮拜成勅使
 造り物出 一酒持あり

○五月朔日朝
 外院供所 兩宮例の水

○同日未祭
 八劔宮内院供所 翌日撮之 諸社小菅蒲と尊

○同日夜
 政所大宮 八劔宮 源左史神 氷上宮 大福田宮

○同日夜
 政所大宮 八劔宮 源左史神 氷上宮 大福田宮
 衆人歩くられとはとむ故実あり



八月八日
熱田鎮皇門
樓上神幸之
祭式



喜原

末本

古今二帖

風の音ふむやあつとれてワレもふつ孫ぞあの里を夜うらも

伊勢

躬恒

あつま物の孫ぞの里に初秋の若死夜せりり明きあやも

くまの

松風里

名所大名

松風の里ふむれれは徳を養ひるを思ひて心徳をまら

定家

呼續演

年六月十二日相州小田原陣中お於て堀尾金助討死せり遺骸のるよ

播磨架の若母哀憐の儀り此二年供養之儀成りは名を記す川と

三遠川とありて播磨は境堂のゆかりあり又播磨の北町許の一堆の塚あり

新拾遺 乃悔くこゝろをもちとる立心ま友よひ徳の深ふ可なり 嚴正上人

愛知

あいのち深きゆふにじかぬれ浦小朔く海と沖とるみゆ

藤原師長公配所 愛知郡井戸田村旧蹟之き小巻井山龍泉寺といふ

藤原師長公配所

利あり地(治承三年十月十五日)大政大臣友成師長公

平清盛のふよを遷せられかへ西光法師の子加賀守師高殿にせりて井戸田

大政大臣師長の司依傳く東の方へ流されゆ去保元少父悪を府殿の

縁座小よつて兄弟四人流罪せられゆ所兄右大將兼長所才在中將降長

範長律師三人を流洛依待りて配所は後永末ゆいふ大臣土佐畑光

九還れ妻秋を送り速長寛二年八月小石還されて本位復り次の年

正二位小仁安元年十月小前中納言より権大納言小上りゆ折弟大納言

不明なれ首の外せ加られゆ大納言へ小成る半是路之又前中納言より権

大納言小上り半も後山指大臣射守公治治納言後園外ゆれ初を承る

管弦の通小遊才藝勝り坐られ半身昇進滞らば大政大臣才窮こそ

ゆひて又いさる罪の報ゆ重りて流れゆやん保元の世は南海土佐遷され

治承廿今の又東関尾張國ゆや本末罷ゆて配小月と見んといふ事

かある際の人顔事ゆいふ信敢事若一ゆは彼唐大い富貴客自樂天海

陽北江のやより小排徊久し其いお一をいゆり海深路るるふ遠見

常の朗月を空に浦風小嘯き琵琶と弾知言深くて悠閑とてふ月日を送り

笠寺



櫻田

万葉

東海道宮下りゆ海まであり山奇村
戸部村あり其山ありと櫻村といふ

山風のそよぎありまこと田の苗代ありと花ふせさへはく

六帖

高市連
黒人
光明寺

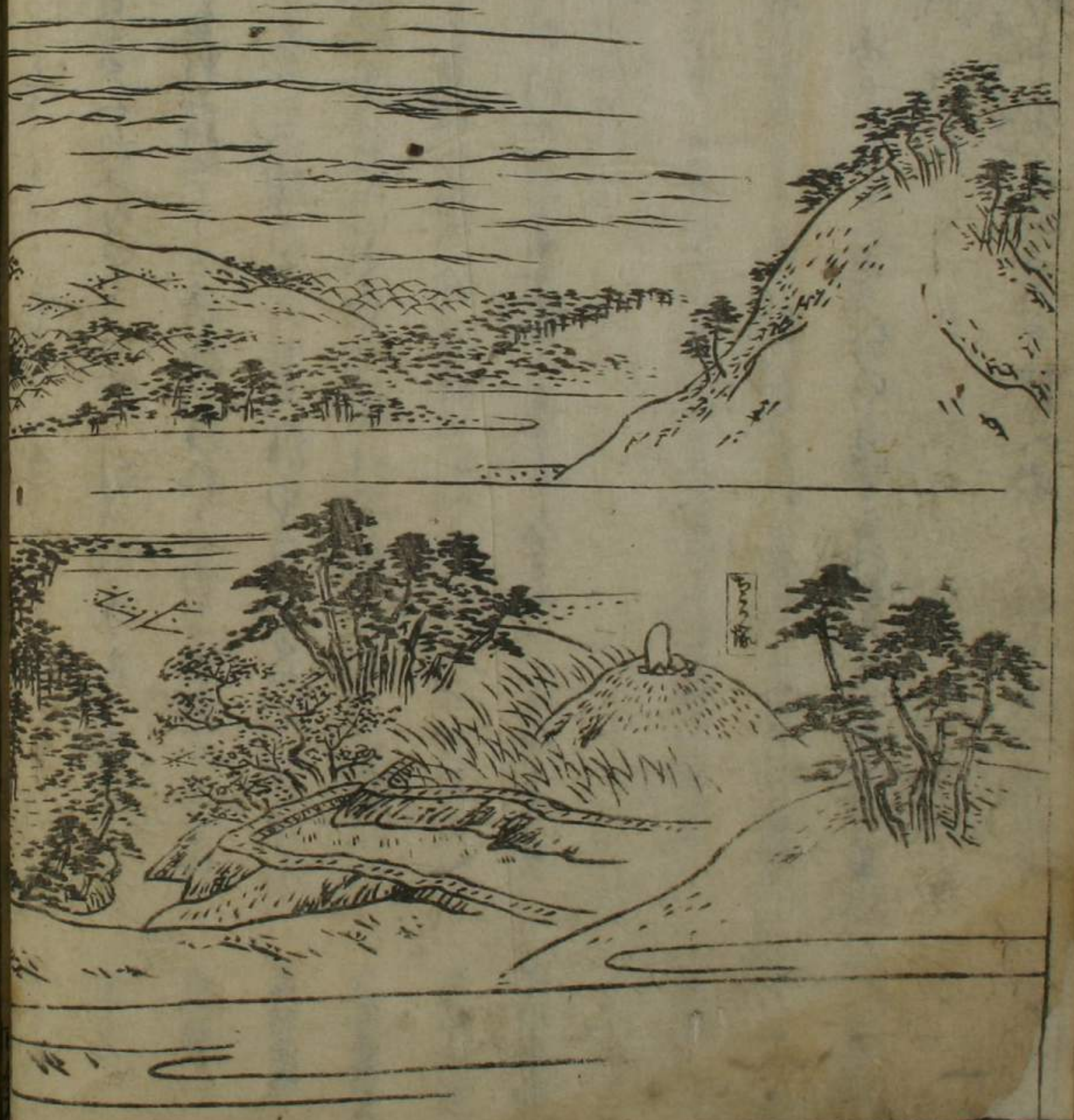
或時為國守三の宮然田明神ふ春傍めりて暮夜神明法樂代為小琵琶
 依一の不其所本末無智の境され情心われる者あり 邑老村女漢會雙
 頭低れ耳と聳といふも更の清濁と分て呂律と如きあり されども胡巴
 琴が弾せし魚鱗躍進虞公歌と發せし梁塵動揺くおれ妙と窮る
 時々の自然小感と催を理るれを諸人身の毛竖く 函座より異のさひとるを
 幽深更ふ及んぞ諸香調の肉々の花芬馥の気取合に流泉は曲の間ゆ
 月清明の光取争ふ願ひ今生世俗文字の業狂言結語の謬取のりて
 といふ朗詠として秘曲と弾ゆひくを神明感應小堪きて賢殿ふ
 震動ま平家の惡りありせむ今け瑞相と争ねむとやさく大信
 感涙とぞ流されたる

鳴海神社

蕉翁

ふも家

本田通權
和奇の達人
出陣せられ
尾州鳴海の
磯辺に通り
し時國の依
りし備
みみ跡跡
具河通權
古本と喰む



古松の下に標石あり今川上総ゆき義元戦死所と傳ふ明和八年十二月代念
氏の建つ所なるは此の古蹟なり又若江村の山中今川義元と傳ふあり
あれも今川合戦の時
我死の場といふ
信長記大意

頃永祿三年五月駿州の太守今川上総ゆき義元大軍と催し尾州
法洲の城主織田信長と攻滅し直上洛あり頻小風雲あり久
信長の江州に佐々木義秀小三子三百騎の援兵ありて折々此石軍將
こゝて今川の上流に遮り中流鳴海に兩城出山只馬ぬ弘家同半内弘高次
をいふを智く今川内通く故と又安寺の若く今川義元八千
軍兵を渡されを拒む早今川の先鋒の遠州井谷城主井伊信濃直教直
小三子の境に至る五月十二日大將義元四万餘騎軍兵を引率て駿府に立
同十六日沈埋附小陣なる信長軍將佐々木元就山田重政及柳本元春
は源と持の寄り内松平昌高正親高力新九郎直重貞之丞蔵外元勢
討れたり同十九日鳴海に根城を築き佐々木元就法洲に援兵を遣はし
鳴海の近に桶狭間で今川義元軍を破るは根城今川勢小圍れ

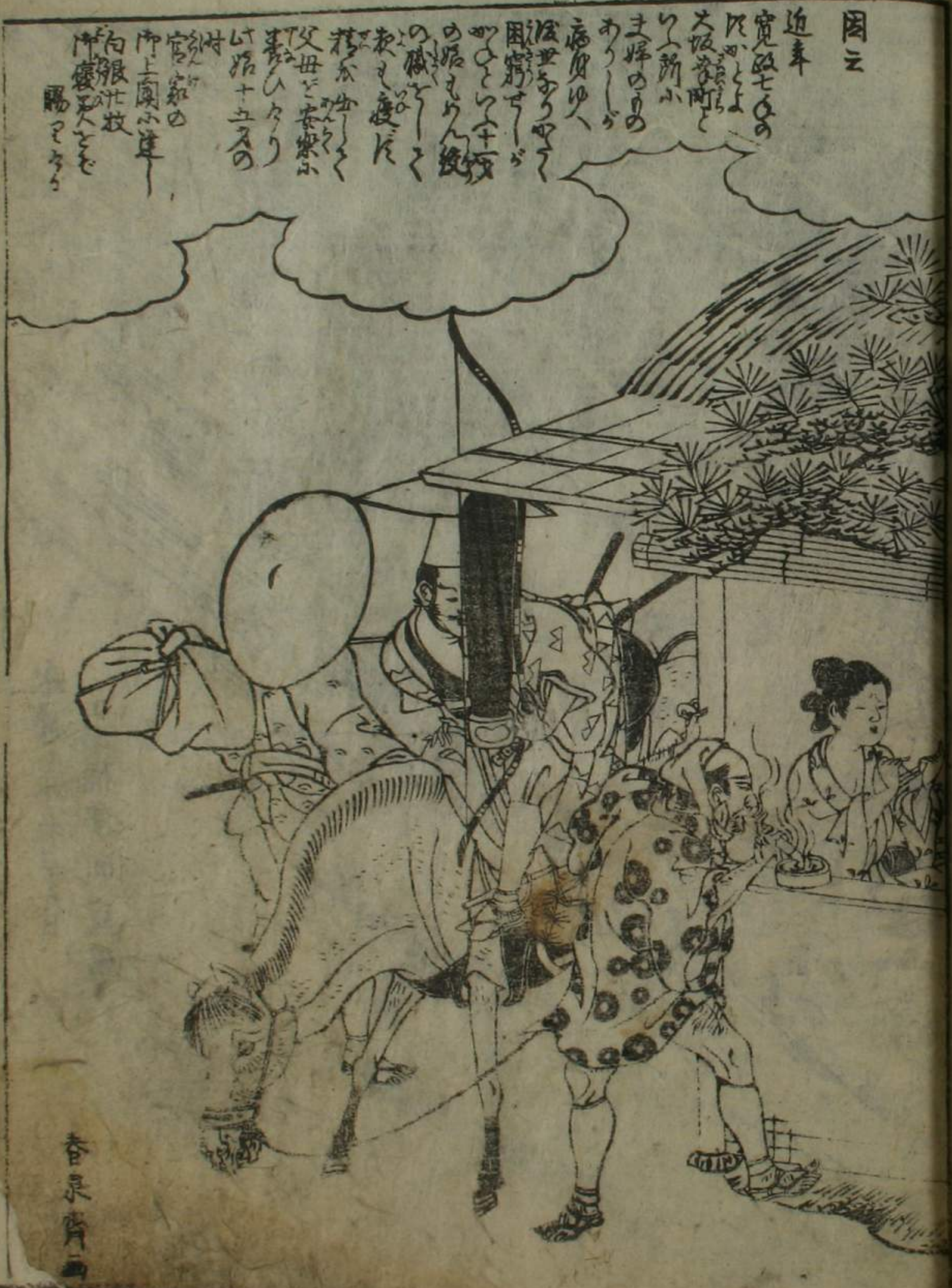
まきまきよー 初よりなる折第信長の諸士と懇て酒宴く居あひし早
れと扱つらんを弓矢取て何の詮らんを馳向く衆えと是二の合戦と
遂罷軍門は晒さるるものとて十九日午は幕おきまゝ熱田の方へ馬
まき丸根城あさるゝ以お小雄雄谷衆を志れたる尾州は軍勢休より返々
此来り熱田の旗を口めて返付より信長熱田明神へ傳へ武弁肥後入道
夕菴と云ふ願書紙書せ神承りて讀上る甚時明神は内陣を物具の音類ふ
圓かれ信長信作膳お銘し今日の軍勢方の勝利疑あり明神の加護
ありとて諸軍と下知せられたるまき丸根城味方は先陣申し幕に合戦始り次第
とちして攻め信長は先陣を依り集り秋田島を射れり酒の幕おきて
尾州方若室長門も自孝援合おき今川の兵八百二十人射らるといふも
終小島守も射れりおれりして依り々々秋田若室二人の首級捕獲同
きり衆えんぬ丸根警津は城攻め信長の軍將おきし討られ
首途より一は城捕獲るのゆゑ合戦は終り惟幕は構て酒宴あは

せられり信長いよ城攻めまき丸根中流おき一旗を逐さんと宣ふ時小池田
勝之助信輝林佐藤も秀頼毛利新助秀詮末田信六勝家も申し信
故の大勢は味方小勢なりと所思意ありと止れども信長は先陣を
寺は東に閑道は怪く若昭寺の岩乃近き山谷にお到り後討の支度
馬の響は緒せ士卒に胃と着る白布はのり一様小飾等とてせ行と
向へ進とるよと合えんと定り後入る衆えの本陣小押あらし其折あ
夕立顯小池ておきやうとて四後陣の勢は故の衆えりともあきとて仲断りて
居るる取縁波と云ふ川と相揚おる今川勝頼小周章駿所はもと赤田大次郎
利勝本下雅樂助嘉季中川金左衛門秀胤毛利河内七秀頼同新助秀詮
佐々向と五馬技盛るるおの首より大将佐々木小次郎も築田出羽も謀
山とめりて故陣の後へ迫る衆え三石門可成り馬強る軍兵は百騎をり故
陣小入り横横小馳あらし大将とあらし衆えを働さる信長は先陣を討業
今川勝頼引包する体ありて四方の衆えを巻くも一は縁波大池も一は小池

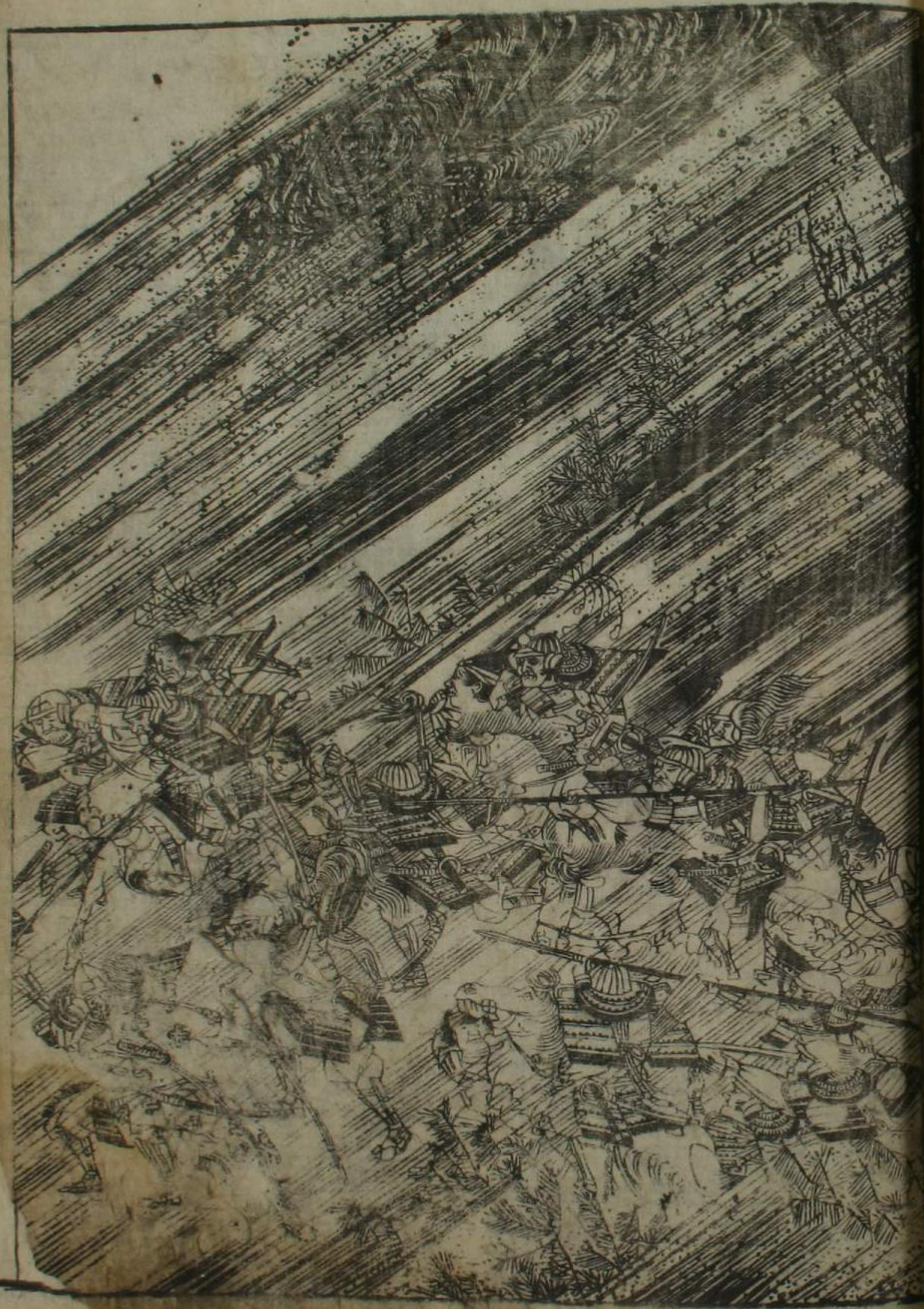
尾別有松村の
名物ハ細糸湯と
藍と小絞と紅
諸國ハ入られと
りハ海ちちり
りハ店あふ多く
賣ハ家
新々あり



因云
近奉
寛政七の
大坂町
マ輝の鳥
あつし
病身ハ
困窮デ
の居えん後
の威
おと
村
け
官
市上
白
中
賜



香泉齋



永祿三年五月十九日
桶狭間夜軍

吉田文行寫





五穀が除く
 何となくい
 ありとせ

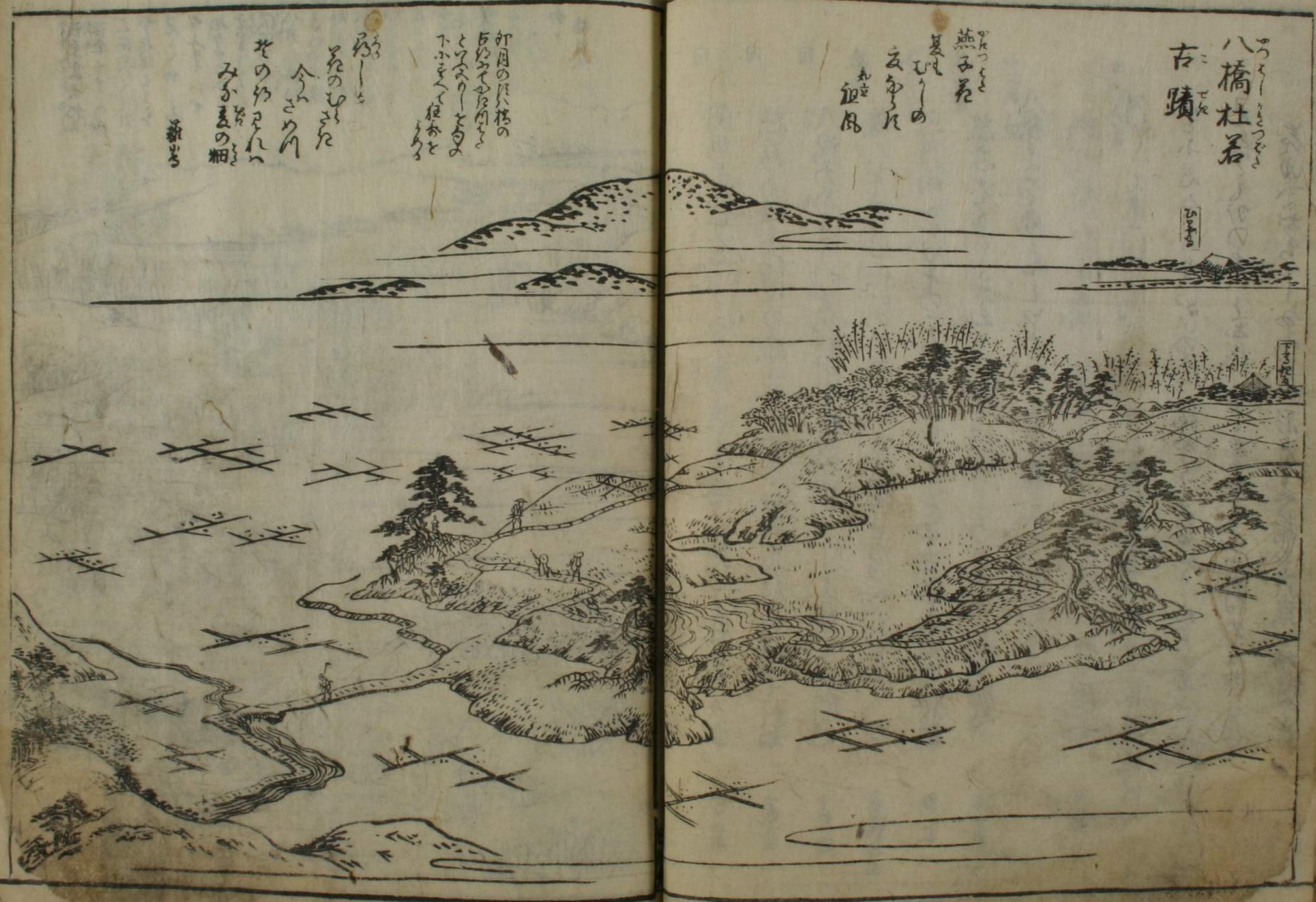


池裡新驛
 馬市ハ毎茶
 四月廿五日
 ありとせ十日の向
 ありとせ十日の向
 八尺以上ハ龍
 と七尺と馬
 ち六尺と馬
 ち五尺と馬
 ち四尺と馬
 ち三尺と馬

八橋杜若
古蹟

燕子花
夏
五月の
五節句
迎風

打田の辰巳橋の
古跡
とてあり
下小
新



在東葉原の松
 樹下くさうの樹
 三河の八つしれ
 つたはらうを
 足くちうみ
 中へまいで
 あうらうふ
 結るとり
 只道の水
 八が一橋の
 水のゆくほ
 あつてそれ
 公のうら
 づとせう
 あうふ
 つら
 笑れ
 ちう
 ちと
 松中



ひう
 御通筋に
 深きまき
 流さる下飯と
 してあれと水
 ひしちうけ
 通るあり
 うれおの風
 やとび
 つら
 こころ
 へあは



春泉

書二のりつ上の句下は乃多を成たる所也他抄倍のなりと云々
い原の中は乃ゆ川の人をてかれ橋と八つてをかふうてか八橋と書なるは
真淵のあせ川と辨トそ水と四方は田圃の用水とて八流れの小川とて
あれ橋とてたりはゆふ等ひれおくんと書りり伴尼鎌倉より
附の早廢して橋も燕子花もをてんてりゆれ年久しに廢蹟をれ
い任務お倍りて社名の幽艶るとおの二名自吉花もい
齊宮云々
夏茶のちり中にもあよま折社をてむと云々あり

八橋社名の圖々無うしてり風傳ふは画諸品の時結衣服の織物鼻丸
名まてゆとりて圖を繪もるに及ふま川は國一州の名高に勝蹟をり下

橋雲廢寺

八橋古跡の側はありむうハ伽藍巍々として門の深倉海邊あり
東行西行の旅客きたり下馬を令總一一堂ありあれと下馬提を

無量寺

八橋村にあり禪宗八橋山と号堂あり業平作一筆薄あり
堂後には杜あり又八橋古杭あり

當寺縁起不詳形勢因縁慶四年其遺骨の半はちと初一と其後寛平四年
祿先遺念によりて自像と遺骨の半はちと初一と其後寛平四年

五月十五日は入江の汀は廣を築てふは寺慈心一且吉野川の上昇りて
業平の自像雅よしてわあは若は六哥仙のそ人一旦吉野川の上昇りて
飯の所と知と云々又八橋の寺は寺説は八葉の鬼ありて

投神社

賀茂郡猿掛村にあり高九日高國ありは英波屋張り教匹の馬七殿あり
高山之例祭九月九日高國ありは英波屋張り教匹の馬七殿あり

祭神大碓皇子

景行紀五十二年投神山小登、地毒小中、豊ト大イ
い皇子の景行帝弟二の皇子日本武尊の皇兄社説云

御年四十二云云或云古事記岐美二尊の神子小嬬那藝神あり投投
別むおは神あらん延喜式内又文德實録云仁嘉元年投投神社
從五位下三代實録云貞觀六年投從五位上同十二年投正五位下
同十八年投正五位上元慶元年投從四位下云々

矢別宿

別東矢別といふ國名凡土記云むり時本武尊東征の時
別東矢別といふ國名凡土記云むり時本武尊東征の時

梓弓をそ紀の里にゆを橋をふのこわるあはくはる
狩人の矢別ふよひをりあはあまわてんさる川水
道のれは橋のこのは紅葉してあやをそこの里をらん

類聚
富士丸
夜更雨云々
廿元書

一輪寺

夫船川
家の
中と
流
李喬



夫船川橋



漆瑠璃姫墳 西矢野たの方面の中ありひりく矢野の宿に長崎の

比まれの漆瑠璃姫作と云ふ今この漆瑠璃の始り又い里小雲授手
判官吾妻下りの雨より宿美婦塚 同前東の山あり圃業如身
は姫を愛しゆへと我

矢野橋川 夫別里の東あり源岐山山溪より落く末ハ野塚川といふ
西尾に到く二流と樹海に心 膠漆を三河といふ事ハ夫別川男川
豊川の二太河

三河之瀨瀨物不落を提刺爾衣手湖下児波無爾 春日

新六帖 名寄 名居せをあらうしてわよあけさうやまを此川の鳴乃一むろ 行家

矢野橋 夫橋川ふ架以長廿武百八間高欄頭巾金物橋杭七十柱
東海才一の長橋なり

東紀行 う死せいの海と云れいと梓弓屋を此の橋ふせをん
真まぐおをれと云わはらん夫別れ川乃橋の板を也 光廣々

今いむ 建武の足利治部大補尊氏謙倉小在 天子の命に叛くは
新田左衛門督兼貞常度使と蒙りてまにかりの西に小陣も足利直義に

い川の東にゆく上下の瀬とて進まりし官軍馳合せて足利勢を伐
勢にまで返討せたりたるは時足利も溜り退駆たりたり足利謙倉小
も味を我ぶるうけりと天運といふ事新田伊豆の國府に降ぬ我勇
威小傲られぬ謙倉の体中却り足利も我されぬるも情れ抑は合戦に根元
艦小 後醍醐天皇公家一統の御代小帰又大塔宮足利直義に助けを
直義姦佞邪知者なれば謙倉中密小隙を 夫皇は御恨ありて足利直義すき
初ぞありたる尊氏新田小攻られて敗れ謙倉に建長寺に今判官得衣の法を
成隊小出さると云れたるは諸軍に練られ又旗上より八十万騎の軍勢と
成て勝利を得ぬるを夫末紀小入り星霜累りて此川の水の古今に流るは
悠々と流る西海に海風撫やして春勃の猶度いりと雲ありて威風揚
凜々たるこれ相如が橋柱の雲もく張子房々圮橋の兵書も入ら
只五粉の虹と云ふ架せり長橋といはけ所の事あり下
西原紀行 本林 建武 戦場 恩賜 旌旗 如日 色 東隅 雖得失 粟 榎 羅山子



都
 池
 鹿
 夕
 夕

岡崎の湯園都會の
 地々々々買人々々々
 美のあたるとり
 半かー仙方延壽の
 良業のあめあめ
 岡崎女帝亮の
 不老の探とるも
 みか縁の風流々々



ま
 の
 湯

ま本

あつて山にむく山の岩はト推折を先一のうみは

鎌古

く我ふん一とさうう人のさうあはれまきりなう二むくの山

同

ちうはなは聖海れきとらあつたれまきりなう二村の山

千載

二月をみ場たむく海のやとさひきふはとてまきりな

衣の里

岡寄の山あり母も書に吟放下とあり内藤侯領所たの

十載

徑ちうくまぬもの里ふぬふり二村山とてははれ

同

直塔とてはなしてうん極花あぬもの里ふ白ふせうり

ま本

白妙とてはなされる卯の花と衣の里は備あありなる

藤川

赤坂まで表里九町むり一は藤川本宇治川にひりり古流あり

方与

はなはなとてはなされる卯の花と衣の里は備あありなる

紀行

あつたれまきりなう二村の山

山中里

赤坂まで表里九町むり一は藤川本宇治川にひりり古流あり

同

あつたれまきりなう二村の山

宮路山

赤坂まで表里九町むり一は藤川本宇治川にひりり古流あり

同

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

十六夜月

あつたれまきりなう二村の山

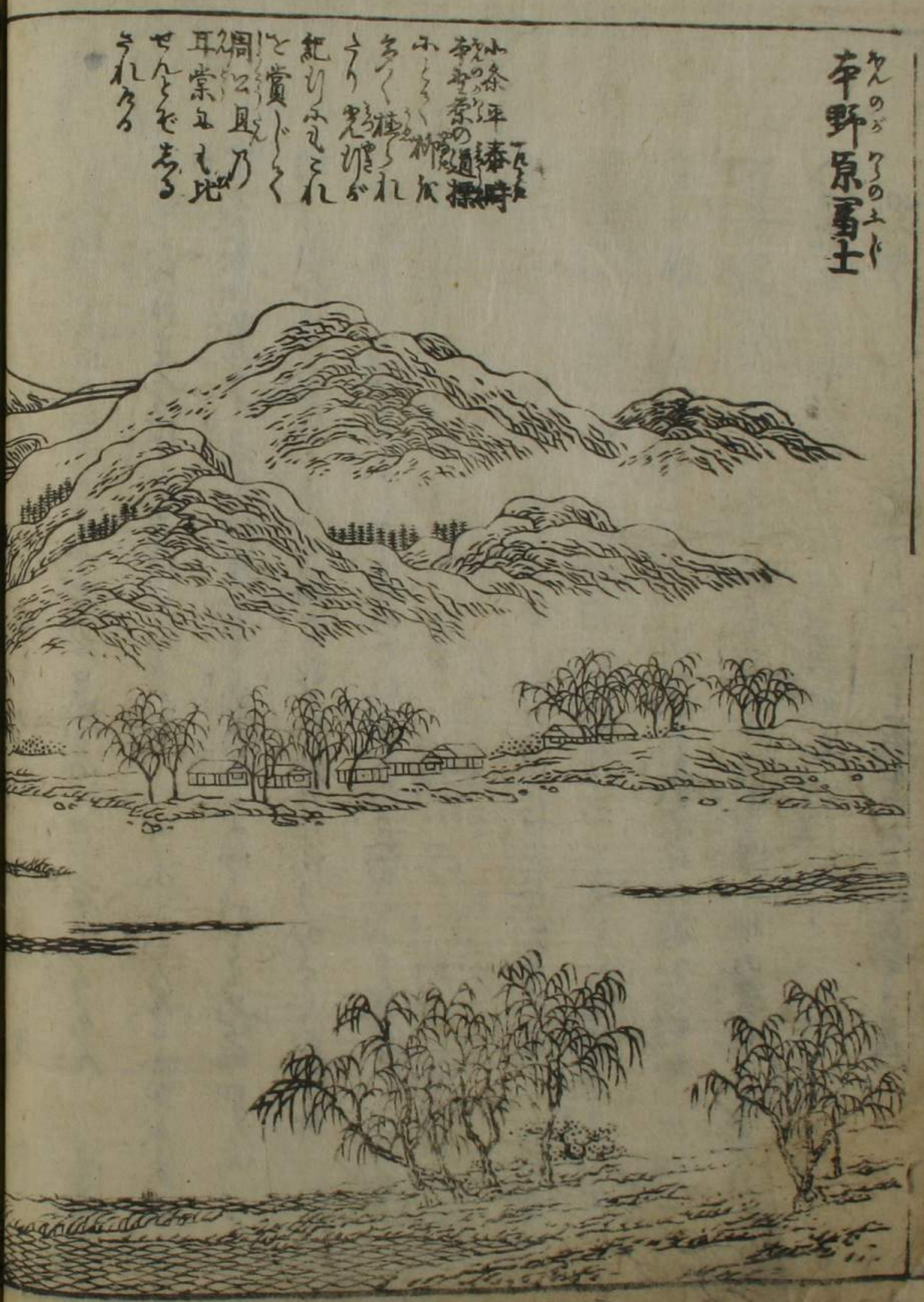
十六夜月

あつたれまきりなう二村の山



榮華春色脱蒼々
 身柳や
 永人君の
 州の木々
 蕪村

洛東天籟
 餘風



かんがのうのよ
 本野原勇士

小糸平 春時
 本野原の道標
 ふくろ 柳
 多く 種
 うり 鬼
 紀のふた
 と賞
 調は 且乃
 耳堂 五も 比
 せんを ちる
 される



賢名如雪
 雪飄朝厚
 問聲聽天
 下論符氏
 夙據王猛
 計何勝其
 日定中原
 右題道鬼摩中
 鹿聘之西
 熊尚之

應
 之
 名
 去



三州
 牛久保
 山平助
 故居

甲
 乙
 丙
 丁
 戊
 己
 庚
 辛
 壬
 癸

活
 橋
 印

祭神菟上王

古事記云開化天皇條下大股王之菟上王
者比賣臣君之祖社説云祭神菟上王曰
鳳年中依神告併祀八幡宮祭式射取雀十二羽爲祭牲
三代實録云貞觀六年二月授參河國正六位上
神從五位下
鐘銘云參河國宝飯郡渡津鄉免足大明神
洪鐘
右爲志者天長地久仰願圓滿國上安穩諸人快樂所
奉鑄也
大工藤原助久
勸進聖見阿弥陀佛
檀那朝阿弥陀佛

應安三年庚戌十一月

此所の村老云此所は社頭の東方土中より掘出に其遺蹟方五間許の地
今より不詳に括む位連引りて

山奉勤女故居

宝飲郡小坂井の東牛久保村小あり今第跡田圃にあり
牛久保の長谷寺小勤女の寺伴摩利支天の小像弘安並に
いへ甲州源氏武田家軍師の初は郷小棲で躬龍敵小耕し
一時烈國小
際流して専軍學と假て又又地理と曉し箱畧に請し胸中に八陣と
畫て天下の安危を能所を觀ては牛久保を蟄し其以天下廿四將の真一人甲州の
大守武田大膳大支晴信雜髮後駕と狂ふめされと顧る事三たび及ひ

晴信曰われ小勤助ありと奥小水ありと一再言復れ身分れ
際不出陣ありと日教僅小十五日の間信州おれ九隊を隔れられし軍師の
計策小據し成人云和朝の神龍明劉基を比せんや其願名爲竹中重治
穴山梅雪真田幸村をといへ山奉勤女をいへ

砥鹿神社

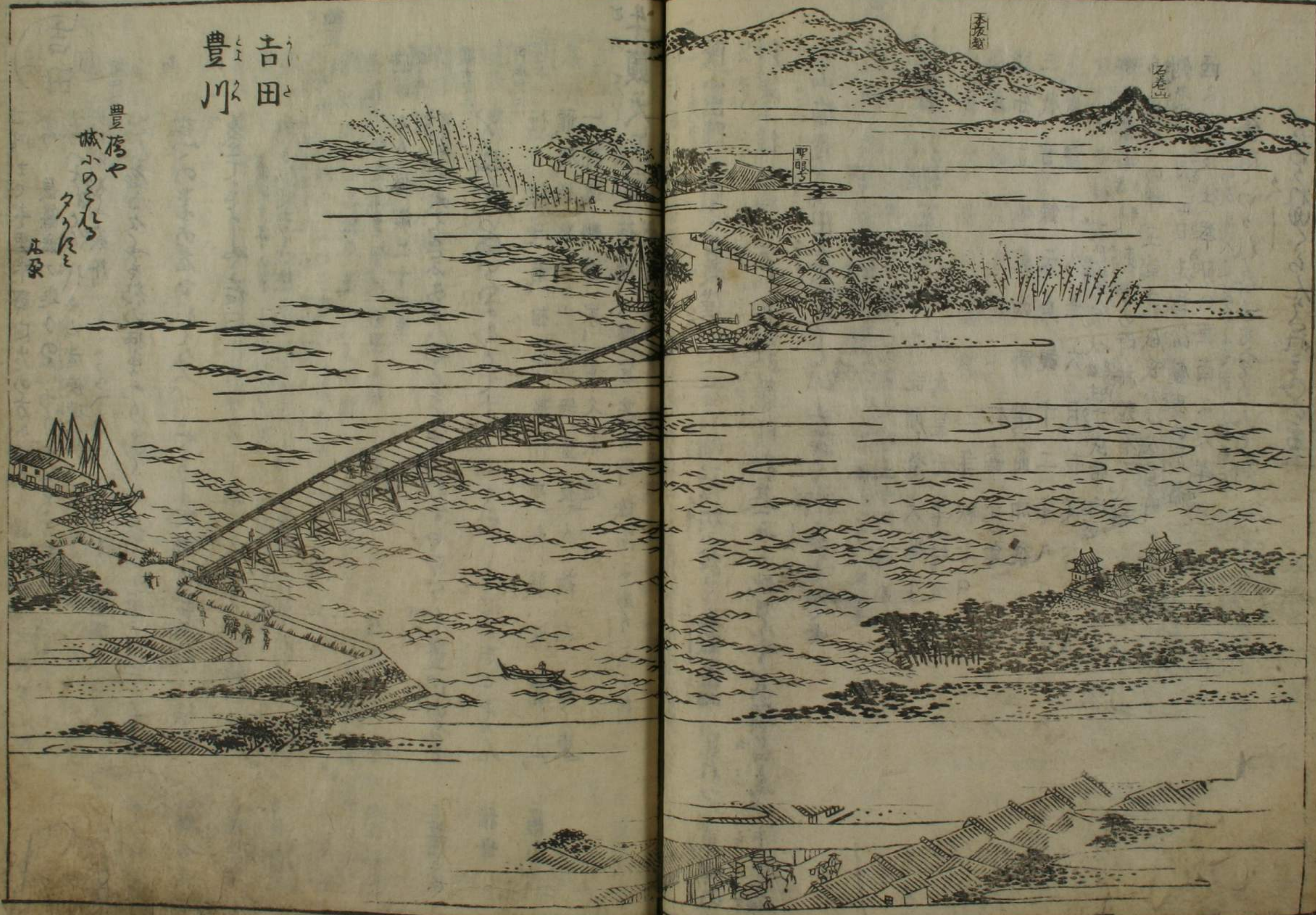
寶飲郡 諸書、飲と假し一宮村小あり延喜式因峯の社と奉言と稱し
土田より 蘆へ三里山路五十町峰の社頭と奉言と稱し

祭神大物主命

文武天皇元年始奉主田加神禮
文德實録云嘉祥三年秋七月丙子朔授三河國
砥鹿神從五位下仁壽元年冬十月乙丑進參河
國知立砥鹿兩神階並加從五位上
三代實録云貞觀十二年八月授砥鹿神正五位
上貞觀十八年六月授從四位上
社説云祭神大物主命文武天皇御宇大宮御公宣
卿煙叢山に奉祀勅使の時神意有て公宣卿とて
らひ今今の神主草鹿神の流裔なり
西に後投社奉祀の里南に大洋朝あり
依はつれんとも多りなり江のめみののよきゆき
五つれゆくらんをれよの香みよのめあひしと稱せれ
推十世

吉田
豊川

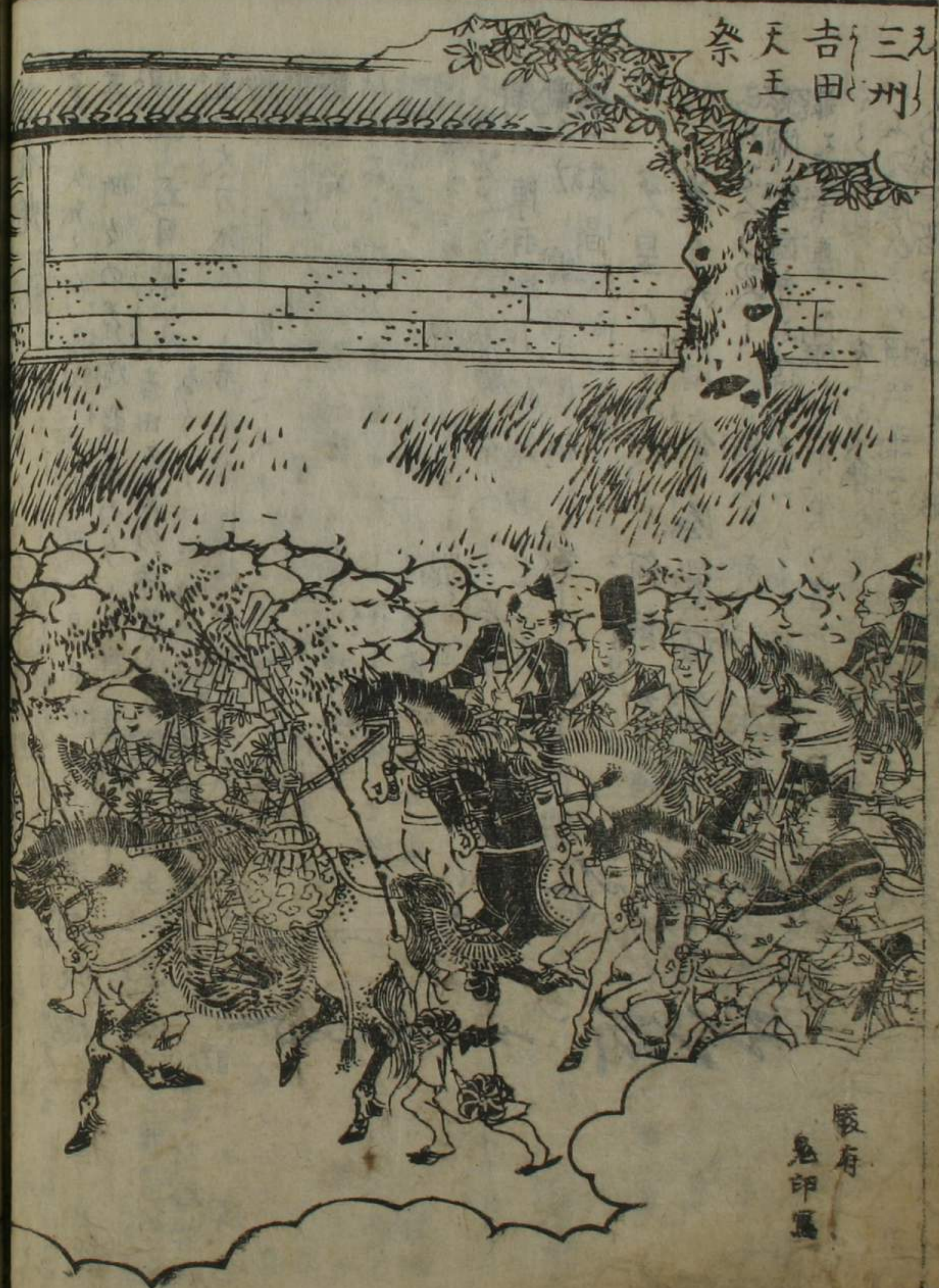
豊原や
城ふのり
夕うら
み原



六月十五日
每葉



三州吉田祭
天王



版有
名印

煙巖山鳳來寺勝岳院

三州設樂郡門谷村の山嶽あり

本尊藥師佛

長き寸八歩爾基利修仙人一乃三體の修日光月定

神祖御宮

諸堂の上方より降り降宮殿壯麗微妙

拾き

紀伊半島の林は時代よりあひつゞ今れ心もど

紀伊半島

ふみへの林は時代よりあひつゞ今れ心もど

忘れぬ

うらた

送爽鳩子方之三河路入函関倉海波物茂卿

杜若水寒芳艸歇芙蓉峰齊白雲多

鎮守三社権現

中央熊野権現左山王地主権現右白山権現

六所護法神

利修仙人百師園より降朝の時二人の護法神

開基利修仙人堂

その人の遺像を祀りて其の徳を尊ぶ

三層塔

常の堂に塔を置きて其の徳を尊ぶ

鏡堂

鏡の徳ありて其の徳を尊ぶ

八幡宮

伊勢兩大神宮。辨賊天祠。天神祠

昆沙門堂

一王子。二王子。荒神祠。弘法大師堂。元三大師堂

鐘樓

諸堂の改修圖画より入りて其の徳を尊ぶ

名號題目石

樓門の傍にありて其の徳を尊ぶ

八王子祠

生土神ありて其の徳を尊ぶ

奥院

白山権現不動尊ありて其の徳を尊ぶ

煙巖山

本堂の西よりありて其の徳を尊ぶ

勝岳院

本堂の乾小當りありて其の徳を尊ぶ

留瑠山

奥院の壺ありて其の徳を尊ぶ

隠し水

西谷よりありて其の徳を尊ぶ

高座石 巫女石 傳ま本堂より乾の方より利修仙人山神の招請

巫女天孫の聽聞に仙人説法し由り所と高座石といひ巫女

尼行道 歡喜せし所と巫女石といひ

尼行道 仙人居りて尼の身は白く一七日遠見せられども仙人

行者帰 當山の嶮より本の方大空に行道して行者登山の時岩路峻く

積橋 山ありて忽然と積橋百歩と足と廻合ひ橋と云

篠谷 南の方小高き山ありて山頂に洞ありて洞の奥に

山伏堂 馬背。牛鼻 俱は高山あり

又高山の推古天皇に勅願ふして利修仙人の開創之其に上宮を子

攝政の時三河の國百奏して日桐生山に桐樹あり相傳神代より

虚洞小棲其西の枝小果を棲り其尺八咫尾の尺八咫全身五彩金翠ふ

して啼聲雪々たり人まで其名を知らず一日二尾羽と落ひ故に

獻き又其洞中は併像あり金石ありて土本を非び子持に寶壺を持して

金光ありと奏ひ女子これ以て國是ありて尾の尾は文徳と好む今ある

蓋階下神皇の紀と關に儒佛の道弘むの表表彼佛像の瑠璃光佛あり

後代龍去り精舎と成りて同者此法字記を蒙りて利修仙人高山七本指

一椽伐て業師日光月光十二神將四大天王と彫彫一巖上小女垂衣今世を

是に皇太子を驪馬馳て空中と馳のふ跡あり是に河邊樂の臺と

太子傳あり故に業師と稱し厥后文武天皇所臨の時業師破八雲を

と勅使して仙人を召し利修仙人再三辭しぬも勅令遁れず内

ありて加持となりたれし御帳忽平金貯せり其時天皇仙の意願と

勅問ありんかに答て云烟を袖に青苔を衣に松實を服して

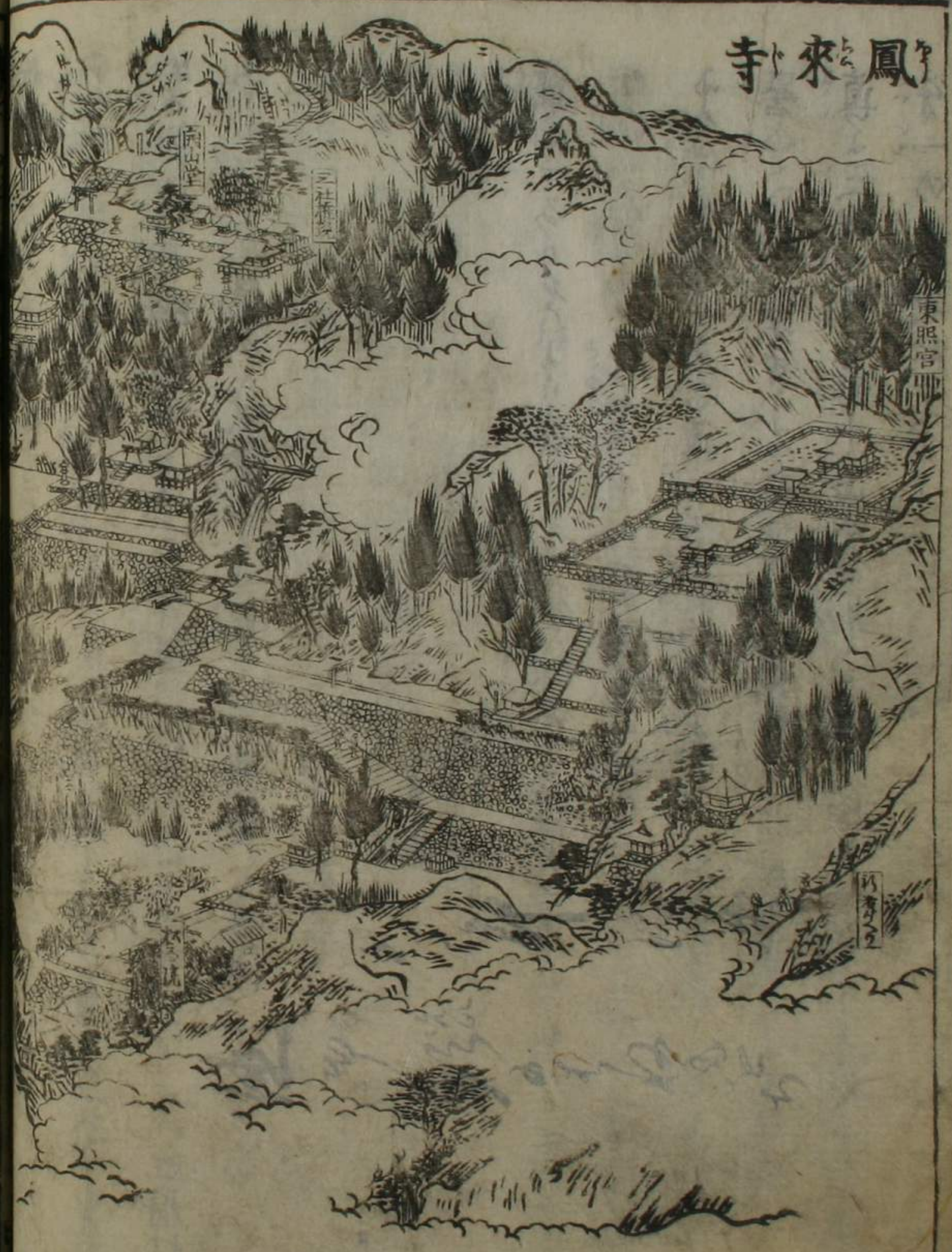
親まされば身ありての願心あり國家を泰然と居りて伴堂を建て尊

と安置せん事あり本來に願を乞ふと奏す一々に感のりて三年造迄其後
光明皇后は清華にて風来寺に願を賜ふ又青赤黒の三鬼ありて常小利修仙ふ
隨從せり仙人入定の時三鬼の首を茶師堂の下に埋め高山乃守護神とて
元和年中本堂炎上の後遺を折朽石櫃よりふれ取出し高山の鬼僧初て
三鬼首とて入るるも又えのち封して藏め埋しとて其時老翁がれ道導成して勅使
勅使公宣卿登山の折り本宮嶽へ昇るる其時老翁がれ道導成して勅使
高山山へ送りたる公宣卿御師也

吾務や海山のまのこひの似く浪やとさけが松風の音

本宮嶽の神傳ありし事と記さる毎山月二十日十四日に若菜樂と親ひ獅子舞
田樂修正會の節捧杖振もつ三鬼の由縁とて押開山利修仙人原山城園二葉
里賀辰岡賀都岐麻呂の子也 欽明天皇紀二十一年庚寅四月七日小誕し利修
童子と号く旅長の後忽然とて高山嶺山事り後中に五峯山の長杖仙人
保ちたるより万壽返と云所今あり陽成帝元慶二年利修仙人二百九載
の時勝岳の深窟小入定し高本慈氏の出世と俟とてり巖窟小池水あり今に
時々振鈴の音幽小堂ゆきとこれ武陵人桃花源小遊小似たりまろ江府此
あふ小治まろまろ杖葉山より登りて山路八里と登てまろ小到る京師より清
まろまろ御油の驛北端より入り高山門ありて八里餘あり

藤田 大城 半尺町 長山 小岡 柿本 東上 中村 御油 山宿 八幡
野田 新城 北地 妙里 半丁 宗高 志多羅 大壺 岩屋 推現
辰彼 新田 下谷 津井田 大見 銭龜 鳳来寺 門あふ 門谷 町とく
瀧川 新田 追分 門谷 辰彼 鳳来寺 門あふ 門谷 町とく
然泊るありそれより橋をたどり樓門小く石階登る事約く九町ありま
町毎ま石標ありた右より老杉翁鬱して旭の出る事迷々して塔屋の西側
ゆる僧房連りて夫名直三白の二流あり一念二十れ諸法を厭し胎金西部の焉
磨會双具一吹牙小完れ寶厨金塔神窟伴龍玲瓏して壯觀なり
直王王維の件と好し山水絶勝する清涼寺よりして冬州の名を得る
牙一の名刺ぬるべし



鳳來寺

東照宮

石香炉



志鼻や
うしろ
は客
寺



江邊

巖窟の
観る

二川の東ふり三州遠州の國境

猿馬湯 高十丈余中二十丈許 猿馬湯の茶店ふ柏餅

海道の松蔭をのりく 遠をせりふ東のふよりて富士の山つて白く

白妙の若くはも備ぐりあるびく半をぬふは

荒弁まきで幸里九六町 又白苔はくも事久須賀

新といふ洲賀と書へ一賀の助字は須賀

初ハ汐見坂の下ありえ縁年中津藩しては所へ

白洲賀漆 今さざくおろぐべえ白菅

松のげのり海つけて白雲のみを別れく出る松人

白苔の東の段路は下倉海と見れば汐見坂の名あり

遠州七十五里の大淵 弱水之里の竹あり

みまは汐見坂の眺 富士見松

潮見坂松吹の風ふり 波の浪花やありらん

今をえ糸くひ見らぬ 遠見坂ありわたり

言れりも実物とまらぬ 遠見坂ありふあり

天地豈識 幾層欄舒卷 古入方寸端

又 波浪雲天俱一色 東南溟海 更無山

聖門有侍人 何敢潮見坂頭 停馬看

高師山 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

新勅 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

債古 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

風雅 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

新千 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

新千 高志或ハ高石と書ハ遠江記云白菅より

東関紀行

昔金して日影の影もたう山あふ海やうさうゆりま
 淡路より赤まられと高師山峯まで同一松風をそく
 秋風よりさる月の高師山峯の浪れききまのり
 高師山を流るにえゆるうすの根をり人あみてそ志
 松風を流るをいづる五版と高師の山の松をり
 風をけ高師の山は白波のやうにりしと惟くもるん
 高師山を流るるの松風をりこの里の浪浪の聲
 高師山を流るるをいづる五版と高師の山の松をり
 冬河遠江の隅ふ高師の山と安ゆらり岸に松の音をり谷川の音れ
 高て中洲の波をりしとくささ川とてふ
 若はさし駒うちりし谷川の音も真しれ山ふきけり
 高師山を流るるをいづる五版と高師の山の松をり

十一日

あつた山もさる川もみえるはせいであつた後一浦風われて松の
 高師山を流るるをいづる五版と高師の山の松をり

橋本

白波よりそ里并赤しむりしと宿駈り
 名不詳
 紀行
 増基法師

女谷

橋本小のり建久元年右大将頼朝の上落し
 遊女より高師山よりそる
 今橋本村教恩ちふをそりしとて
 東鑑云建久元年十月十八日於橋本驛遊女等群
 紫多贈物先之有御連歌

同書云同年十二月四日天
 同書云嘉禎四年二月七日將軍頼經公上洛之時今日
 同書云建長四年三月九日宗尊親王鎌倉御下向之時
 今日橋本驛有御宿
 荒居古老遠綱記云橋本の遊里松花香町といふ人のあふ
 高師山を流るるをいづる五版と高師の山の松をり

遠州
濱名橋

ひらけ橋の長
五十六丈餘
三伏高サを定
陽成帝の時
築成りし四年
後造りし一
二代実録み
足るなり今
凡橋もかく
其名の遠
敷き下一
海あり
王昌齡の作
とす
つる



注橋所

父の見た遠
瀬下野の守
中を竹の
浜名橋の
み

浜名の
そ
橋
長
つる





今
如

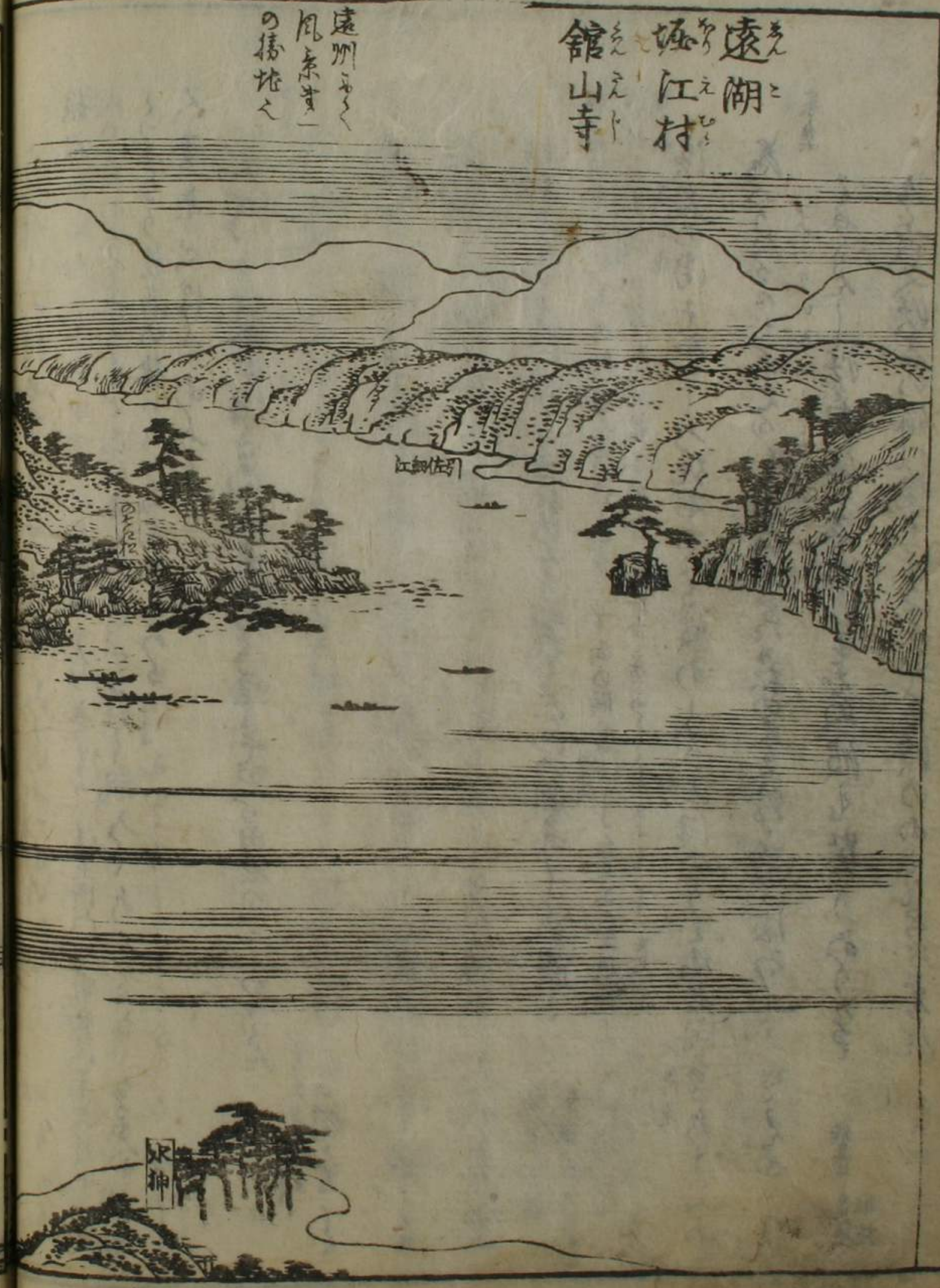
富士
山
一
里
花
島

富士

江
船
引

以
本

哀
集
た
海
川
人
松
の
ま
雅
經



遠州より
 風来す
 の揚塔々
 遠湖
 江村
 館山寺

寶樹菴

赤巖



法橋中住
印

橋本...の橋の...行々たり...
あざりぬ...
湖上遙...
おび...
おろぐ...
高師山...
愛誠

高師山...
後柏原院...
今切...
有司...
波...
遠州荒井...
羅山子

山ははくさたる陸地なりしが中流山なりや此貝おびだくわゆ
て海へ入幸其跡かくれくゆとありて今切名はたうく古老い
傳う我國の伊弉諾伊弉册の産給ひ大己貴少彥名のはくれると之の真著
いふはくさむと流るれ山と巨壘が壁開しうれ争り争事もたうや

一葉扁舟寄旅身 潮波通信 遠州濱
海山何借巨壘手 我國元來造化神

濟北集 遠州橋下作
松根沙上此盤桓 且以脚悲換目歡
左海右湖同一碧 長虹併飲兩波瀾

身延紀行 荒井の口より富士山と見ゆ
碧天雪白白雲向走 率兒童亦仰顏
東海初遊多少客 富山不敢向何山

角避美の神々くちん流名の湖れ名林をとりへくさくは是より備わたり
せれと舟僧房さそく小人見大人見乙君村振なとあそふあまゆは
小舟多うみくまい海は秋の本れまちるせりあり中界こくま
うら舟の船はの備ふつと本興寺まう川中流飛舟并雅康の
法善堂のむし書付のふふふ
寺ひまはれん二冊新たは双樹の橋なりたははのふれ生田の杜け
灯り寺入る常盤山の巖とわたりしもの所経の常盤山乃

舟のあいまる堂も僧の籠れるむらもまなまのてふなるの南里免たてわのまり
ゆる空まなまの馬てまうくう不所経よりあると
おろくく花を備経もまうくあま
遠州八野 方壺

は浦も高砂山れろろはりともや新居の備は淡の松ともくく
流よりこち死てねの楳とあらふ白波と見えあふこの風をふく船の乃
くそく入出の備つてひく西大寺まのなる山は渦山といふ湖
のそりたる太田の江左大知波の江へ寺乃あふの楳ま
々ふまはあまはとたりは嘆きまはえ下すに花の本れるに
波の立のれがの川は楳楳のつれと波の花とも見えまのつひ
見えれり一峰は醍醐の花まのりつひ
千貫ねといふあうのたきまはまの瀬岩といふあひま
つくさばりれ湖の中まのたのたがく不投くまあれを吹く
流の本まう死すまはまのたのたがく不投くまあれを吹く
中まの生流と見えりまのたのたがく不投くまあれを吹く
まのりまのたのたがく不投くまあれを吹く
はまのたのたがく不投くまあれを吹く
あまのたのたがく不投くまあれを吹く
その流波と見えりまのたのたがく不投くまあれを吹く
いふまのたのたがく不投くまあれを吹く
いとわ一日の中まのたのたがく不投くまあれを吹く
まのたのたがく不投くまあれを吹く
いふまのたのたがく不投くまあれを吹く
とそまのたのたがく不投くまあれを吹く
来たまのたのたがく不投くまあれを吹く
大福摩訶耶寺といふあり庭園給りてある古寺ともなり

引佐細江

千載

東紀行

引佐細江の記は右の記より古くは... 引佐細江の記は右の記より古くは... 引佐細江の記は右の記より古くは...

遠事引佐細江のみとはく

東紀行

千載

引佐細江の記は右の記より古くは... 引佐細江の記は右の記より古くは... 引佐細江の記は右の記より古くは...

夕暮るみとをててまきけ入海

夕暮るみとをててまきけ入海... 夕暮るみとをててまきけ入海... 夕暮るみとをててまきけ入海...

後奉
 御志之
 初満の
 秋は
 女子田親王



引馬

金門畫史
 狩野縫殿助藤原永俊



遠江 廣松

見附きを四里八町為旅の事ハ東海驛路終るべしと云ふ

波の音風風のたよりふたふたを指さすは廣松の情也 元道法師

廣松のつらねはよみ来くる人かまにむしとと云ふ 長谷川

引馬野 威風遺韻 入松去 廣畔 猶呼 千歲聲 羅山

引馬野 爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢多鼻能知師爾 長谷川

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野 引馬野

松と人



永享四年五月
 將軍足利義満
 面々松林を
 權大僧都を
 引馬野の松林
 興に來りて
 あれより松の
 名に松と
 今に松と



石田夏河画

諏訪明神社 淡ねふあり初は國上中治のね原鎮坐あり弘法二年七月神誌よりく神祇大に先驛路の儀を遷は

祭神 健御名方命 八坂刀賣命 社説云信州諏訪方郡南方刀美神同昧

五社明神社 同所あり初は國士久延依波守の末子孫中武術鍛錬の爲に神祇行んやまふま日大明神依波守の末子孫中武術鍛錬の爲に神祇行んやまふま日大明神依波守の末子孫中武術鍛錬の爲に神祇行んやまふま日大明神

祭神 武甕槌命 經津主命 天津兒屋根命 姫大神 太玉命 多玉命 浦翼 倭祖 五社大明神 稱以 太玉神 兒屋根神 天孫左右

四所依波守紀より五社明神と云ふに社説訪社同本代々の將軍家所崇敬ありく社領若干所家附あり所修覆多しは神祇唐門金燈爐樓門石鳥居所修所末社給あり洞大浦神洞所修所權殿鼓樓等葺重し社領之例祭九月七日神馬五疋次敷敷系く

光海靈神碑銘 これに實は真淵の權ふりて為社神主を奉暉昌の碑之真淵に比の在りて其親恩を建ふとを

遠津 淡海引馬縣 爾 坐五乃大神社之神主從五位

下藤原森朝臣 負外民部少輔懸 此朝臣初冠

而嗣父朝臣之家其家世々傳神道復受荷田宿祢大

人之誨也日獻嚴饒神嚴滌白太諱詞奏神遊許多

事悉依上世而其儀雖他大祠 有不及是朝臣功

之一也夫此大神 奉爾東都 乃 二御世 鎮天下

賜御軍大君始生引馬城故爲御産靈 大神也下大

命千尋榜綱打延天 真量 量成宮柱太繁垂椽

高知 奉齋賜 雖然積年天御蔭將壞朝臣恐

畏 忝向東都訟申憂申 始于元祿十七年 七

十餘度 享保十二年七月給黃金而令修造其經

營多年而修成如故延享二年九月以古式奉遷宮

竟是朝臣大功之二也朝臣家本在市中 每齋事

不便雖欲移於社下之丘其地有甚科峨引五百

磐 爲垣累八百 都土 得成 遂作出居則坐觀富日

嶺之夏日 乃 雪時人羨旆長復大人矣是朝臣功之

三也朝臣貌開雅有大度內懷古質外長頭事即有神道者也又多能雜伎揚他之能平生之意如此矣
室曆二年六月十四日朝臣年六十八爾之患卒哀戚
者及遠國葬其社之背面清水谷神祇大副十部朝臣諡光海靈神訓云宇那理通是擬所作國奇龜之功也
真淵因本貫國少時受訓如父悲慕奈止哉其嗣乃朝臣爲壽并其妻繁子亦於予善故需墓誌
爾故人其人也宜以皇朝之言敢不可默徒取所
有事而勒焉即嗟爾騰保門阿不珉烏奈昆氏羅斯
互預例屢之遷哆麼登室畿與爾寧鳴呵哦佐無刀
預例屢之遷哆麼

明和四年五月

賀茂岡部真淵撰

三方原

三方原 牧場ありて三方の系とつてこれれり冷い百八里の系川ありて

杯 元龜三年神無月甲州の大志大膳太支晴信入道信玄甲斐とありて

當國秋葉山より向う多分良飯田の表城と攻取大膳 天野

玄内右衛門左衛門定家より久野の城と攻取 大膳 天野

三音 聖坂一言坂小軍一 二侯城と攻取 十二月廿二日信玄

歩歩信玄の平康の都田の丸山ふまへられ信玄の追分にて

此に 渡坂より一軍と出されこれれり向ふなりとありて

犀ヶ崖 三方の系とつてこれれり向ふなりとありて

大安寺 淡根看所あり禪宗曹洞むりて大膳より續日本紀証

行龕山龍禪寺 淡根の東竜禪寺村あり古義真言宗

奉尊觀世音 大同元年海神より出現其の緒堂建立後世又正

大師堂 終堂 鐘樓 金併比藏 水神祠 攝待所 等々併殿あり

のあり護摩堂 行者堂 鎮守三所権現 比藏堂 荒神祠 等々併殿

西の方より坊舎あり密藏院 理性院 密藏院 是光坊 學子頭

貴桑坊 行泉坊 坊ありて此の大利

近衛龍山公殘亭 萬寺金光院あり近衛義興白晴嗣公又龍山公あり

松

松 申酌拾遺云口村の田圃の神は松あり一様ありて松あり

下りて松の香をぞんぞん酒を
醸も酔も酒盛あられは流し
酒の香の流しをぞんぞん酒を
醸も酔も酒盛あられは流し
酒の香の流しをぞんぞん酒を
醸も酔も酒盛あられは流し

青林山頭陀寺 高野山法性院の末派
行基菩薩の作 一説毘首羯摩天の作も云

本尊薬師佛 文武天皇 大宝三年草創

阿彌陀堂 文六の松尾を安ん
二層塔 大日如来 二王門 執金剛神
運慶の作

勅額頭陀寺 二王門に掲ぐ三代實録云貞觀五年八月二日壬戌以
遠州頭陀寺 預於定額

護摩堂 本寺不動明王永祿兵火の後本堂は安永僧院へ
千手院 實相院
圓成院 安善院 東光院 成就院 性空坊舎教多し今六坊存ん

植松原 松の東植松村に一室町將軍富士下向の時
意孝傳正の寺

蒲神明 神館村あり二代實録云貞觀十六年閏四月十一日授遠江
正六位上蒲太神白伊大刀自神並從五位下云云 神主蒲

茅場 行 十ニ里半許 河内村とのへ又神之町とも云

大船が馬を舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

天竜川 川幅十町許二瀬の二流とある船は一とあり源
信州 越

寺 坊の湖よりなるまゝと傳はれ其所と天竜川

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

舟に載入るはあつたの翼あつた十里げ

天龍川



石田天行

舟田入道 杖方將
新田義貞 飛越
天龍川 絶橋



されど大龍川のあがれを浩々として驚波龍門ふた片に絶ひあり晋
の重耳と壁に投じ槎に浮べし星斗小辺を天界よりひりて建康の丸ふ
新田元中將義貞東國の軍に引くとして帰りきりし中流を平犯ふ
とて大龍川の東に宿ふ者のひ俄に在家に壊く浮橋を七渡され
たる諸軍みるまじし果て後舟田入道と大將義貞朝臣と二人橋取
りてりぬひくふいふ敵軍の者もさうりくん浮橋取一間張繩切て捨り
たる舎人馬取牽て渡りたる馬と若く倒ふ落入浮ぬ流るぬあられたる以粟生
左岸の遺着あざり川中へ飛入二町をり遊ばばて馬と舎人とを右
岸に上肩取起りたるの座取静ふ歩て向の岸へ七着りりたる馬に
落入る附橋二間をり落く渡りたるも毎どくも舟田入道と大將
と二人とをさうりゆらりと飛渡りぬ其跡は候たる兵二十餘人飛りて
將く御個一たるは伊賀國の住人名張八郎と名譽の大力ありたるが
後して取せんて僧武者の上巻を取て宙に投げたりが二十人せんて被取られ今
武人残り有るは右の脇に控りて狭く一丈餘落る橋のゆらりと
飛ぶ向の橋桁に踏たるふ踏所少くも動くは越え難げあるべし諸軍勢
遙かされ見えてあゝいりり何れも凡夫の態も小僧も大将といひの者さ
といひづれば捨りとも覺り絲も時の運もは軍小舟負ひひりて
うしてさうりて云ぬ人さゆらりりなれと起り又梅松輪小義貞大龍ふ
橋のけりせお渡りて後部で故にお向ふ時小舟あて川を渡り高て我々の退
はどさうい難の謀めて橋を切れ武略のひ足り故とても我々渡り
橋取切落して故も急な襲われりと周章ふてめ配りるて云ぬん事
口惜むるべしと橋を誓固せよと渡られし事なぞんて云ぬんこれ
らと考ふるも我貞の武畧の人ふして関羽が賢豪も張飛の雄力と
兼りて後醍醐帝の聖運やばさうりぬん事なぞんて云ぬん事
新田楠の豪傑魁りし七びゆる事なぞみぬぬれ夫の
る傍り所くとさわれたる

平重衡の
 西海の合我小
 舟はけりて
 あらく謙倉
 下りて入ると
 此同の寂ろ
 泊りて人然
 侍従
 籠てられ
 琴の弾かぬ
 涙の涙と慰
 梶舟三
 儂小あめ
 眼とひた
 苦みえせ
 ありあ
 思ふ俗
 あり

銀闕玉樓
 帶晚霞情
 春舞袖獨
 堪嗟何謀
 為有新思
 龍無奈東
 方及落花

笑山



春泉画

池田宿

池田宿の里は古くは西谷の宿なり古人の紀行多くは池田宿を以て

富士紀行

池田宿の里は古くは西谷の宿なり古人の紀行多くは池田宿を以て

丙辰紀行

英濃の青墓遠江の池田驛の宿は長者遊君のりてむし

生還の武士將流は少年鞍馬松門は千金小舎賣とて名なれ

あゝ江口乃津やも再ねたりけん天徳大僧のりされ湯谷もは池田乃

宿のむとちにあゆる事少くしけれあゝ今はい宿天龍の宿の東に瑞ふ

形をり残りて終る小民もりりり守りて居たりる大天竜小

天徳とてこのありるが新田左中將の尊氏と祇ひ員てせられ

る時浮橋の桁けりるるは飛越られるもよの事江都が津

捷の色々を渡ねの舟を舟細流は天龍の舟と今ぞいりりり

池田驛長本倡家處子嬋娟天下誇

腰似楚王宮裏柳面如巫女廟前花

古今不盡洪河水淵瀬相移兩岸沙

池田驛の橋と流るの舟の橋は風をいり入江小舟の舟の舟の舟

旅は物憂ふ心は盡まゆ向之れ池田の宿も着ゆひ心か宿は長

者然野女侍従の料小其後々之位宿せられり侍従三位中ね殿

公見きて日本を侍ふた小思を事ありるる人の々々の所へ入らせ

ゆふ事の不思議さうとて一首の歌はな

旅は物憂ふ心は盡まゆ向之れ池田の宿も着ゆひ心か宿は長

者然野女侍従の料小其後々之位宿せられり侍従三位中ね殿

公見きて日本を侍ふた小思を事ありるる人の々々の所へ入らせ

ゆふ事の不思議さうとて一首の歌はな

旅は物憂ふ心は盡まゆ向之れ池田の宿も着ゆひ心か宿は長

者然野女侍従の料小其後々之位宿せられり侍従三位中ね殿

公見きて日本を侍ふた小思を事ありるる人の々々の所へ入らせ

ゆふ事の不思議さうとて一首の歌はな

旅は物憂ふ心は盡まゆ向之れ池田の宿も着ゆひ心か宿は長

者然野女侍従の料小其後々之位宿せられり侍従三位中ね殿

公見きて日本を侍ふた小思を事ありるる人の々々の所へ入らせ

ゆふ事の不思議さうとて一首の歌はな

旅は物憂ふ心は盡まゆ向之れ池田の宿も着ゆひ心か宿は長

者然野女侍従の料小其後々之位宿せられり侍従三位中ね殿

とつ名お仕置賜と給う油うりてりひひ海通一の英人申
申々都立出く日教経ねれを孫生の平こそまも既小暮れん遠山
の花の残の考やとんえく浦々流々雲渡り旅方乃末の事とと
さひはぐあふめとささいくあけ宿業れ方見らると宣そ
はれせぬものも浪りり

熊野侍従古蹟

沈田の宿攝取山行興寺とつ時宗の梵刹沈田本
者熊野が古蹟なり本をより基の他の河内院とあり

池田宿舊天龍上湯谷墳殘林藪中
可憫宗盛爾聲色汚名濁水共相從

山寺開齊

熊野墳

平堂の例あり紫石の塔婆
建久九年五月三日没すと傳

同老母墳

同所あり銀鏡石の塔婆
建久元年四月三日没すと傳

侍女葬墳

近隣お津村あり沈田宿より
南き里井

されと沈田の長とつる今これ本陣宿のゆ仁安の頂け長者子

るる証跡として熊野権現(俗)として祈り多き一寺を公儲く其名公熊野
と名付二五の歳ありのて其風俗加加能く其名公熊野
笑み金の傍も今ひむりて思火をよめられ

あつ小曝く秋葉墓畔小庵一葉落りの二五作の上人真教

困りくは時々に洵を盤盤善提と申ひ及次流のちろあれと池

田道場とつるありと
ひちの付室小庵川氏の書れ熊野の孫れ傳わり
文事い近湯流終ら土依凡や古雅

中泉

沈田のちりき里餘ありの驛は所遠洲の園府とつ

八幡宮

沈田の生土神といはれは園をち燭魔堂茶師堂あり

櫻ヶ池

中泉よりありの方き里井あり相傳源皇河内院梨池水へ
入遊しゆひとて毎秋秋彼時正の朝立時村民乃
中願をある者強飯と稱入池中一投必し時引ては柳打あふ
其強飯あこと願を成すのちろ又強飯島さうり

沈ひまきり

傳ふ云む比叡山肥後の河内梨源皇といふ加藤の三塔無双の學

者之黒谷法然上人の師ふして源の字公賜源室とも名案ゆあ孫ふ源皇

河内梨はく業とる不伴道の淵を我一の修りあけ悟事あつる

弥勒れ出は侍と二會は曉と期とべ一これをもて令保保龍身

とくあり 於是才子乃諸國小わし 龍は棲所をんせりひに東瀛に使者
並獲れ註記といへる僧歸り來つて申やうい遠江國笠原莊に櫻が池といふ
ありありの蒼蒼海洋々として少の青山峩々たり其間ふ池水が湛々湖底
隈あり 且法燈ありて龍蛇の棲ぶるは蓋池を尋け所の徳寺實定卿に
祈願こと申も阿闍梨ふれと夢く徳寺の杖杖執し毎う情めらんそ
伎とめりて申うけ或夜座禪して一洒の水を掌の中ふ握り雨風吹起し
雲ふ糸して遠江桜が池小到り入定しかふれは波瀾ささきたく驟雨東
壯のぬく雷電を辟塵して村邑動揺は其後源空上人は國ふ却さけ池
頭小除し師弟別と嘆し恩謝の為孫陀經を編し 林名念得しかを
涉回しと大慈の形とされ池上小頭と揚て落涙の体と源空上人も若ふ
涙と流し 師弟別と嘆し恩謝の為孫陀經を編し 林名念得しかを
いは龍身多とて源空河闍梨と成り 歩ふ彼方り末の物物居り

或土俗向て云法然上人は浄土正宗の祖なり 宗風傳授は法然上人の百
餘年以後も貴賤かの教をうけて浄土往生の決定を源空河闍梨の併
道修の師の畜身と成て苦惱し永く之會は曉は待り其難行とさめり
て三印身成佛の勸をのびるや堂しく龍體小對話してゆき候ふといふ
。對て云佛道小大素小素のりふ小素小縁覺聲聞の二教あり縁覺の十二
因縁と觀して得道の聲聞の四諦と觀して得道の因縁の縁縁に
基く大素教ふしての成佛の因縁と見限りて姑龍身は仮て龍女之
會は曉はまのこれと般若獨覺行といふ大婆沙論俱舍論成實論四教儀
等ふえへり又の因縁の智識たる事凡愚の知るさふありは法然上人
縁の縁ひるふは非は修行の成難死と察して末世の様と鑑し 法通
浄土門て兩師俱ふ權化の再來なれを愚俗の身とくく龍體は 浄土
能辨さふさふありは慈悲僧正の仮は魔界ふく生と度とるは誓願あり
慈覺大師と名隱山の九頭の竜と現し弘法大師の真言秘教とのりて

便利伽羅龍と現く觀音薩埵を三十三の化身ありて、（一）大慈の方便

小あはれとて、（二）法然上人師承に約められ、（三）お到りて、（四）お尋ねの

ごたあはれ、（五）凡慮のわたり、（六）あはれとて、（七）お尋ねの

今の浦

（八）見附嘉の浦、（九）今いあせて、（十）お尋ねの

掉さへば、（十一）浦のむき、（十二）あはれ、（十三）お尋ねの

多りり、（十四）橋本の宿、（十五）お尋ねの

とまゝとて、（十六）お尋ねの

浪はきとねれ、（十七）お尋ねの

見附

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

袋井

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

お尋ねの

志留波様
土人ちろはと
父



万葉 山名郡支那

等伴多保美
志留波乃伊宗等
雨雨乃字良等
安比豆之乃良等
己等母加由波牟

之の浦の流るる
細みわらふと
おれやうへ古代の
風観あらん



妙星寺 香道村あり 時鐘あり 観音山と号し 京西日蓮上人の又聖名

名産花筵 香道村の名あり 花筵の産

腹川脊川 香部の東あり 腹川妻の末より小船をくむ

名産 又腹川村脊川村あり 名産 又腹川やせ川の舟を渡るとむ里人の心をぞとれ 雅達

志る波儀 藤原郡横洲賀と相良の同士の白根村の所産 駒形明神の祠

鎮座 中社頭 燈明臺あり 後海船の極 大井川 小迎 荒海のかたに巖のそとく 後よりあつひ出てゆかれ馬の香に 是を教く 是より里人の七十五回此駒形を

いひあつて 其所の神と駒形明神と申を彼遠江の磯 船人より向し 一とまるとまるとは巖あり 船の死ふりて 仲は船の向を 石波の志るとは巖あり 白ゆふ 真淵

昭和42年12月12日寄
和田大作氏贈

